

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	高柳 充利
論文題目	Reconsidering Teacher Education from the Perspective of Stanley Cavell's Emersonian Moral Perfectionism: Toward the Re-education of a 'Teacher as Reader' (スタンリー・カベルによるエマソンの道徳的完成主義から見た教師教育の再構築－「読む人としての教師」の再教育へ向けて－)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、教師教育を原理的に再検討した教育哲学論文である。この再検討は、現代米国の哲学者スタンリー・カベルの提唱する「エマソンの道徳的完成主義」の観点から行われ、論文は英語で執筆された。R. W. エマソンの「創造的読書」という概念を主軸にカベルの思想の教育的意義を解明し、「読む人としての教師」という教師像を描き出すことによって代替的な教師教育の構想が示された。</p> <p>第1章は、今日の日本社会において教師が職業的なアイデンティティの危機にさらされていることが指摘される。それは、自らの職業的生に社会的使命を見いださず、またそうした状況の改革の試み自体からも教師が取り残されていることを意味している。「読む人としての教師」というイメージは、こうした危機の根幹にある教師の声の喪失という課題に応答する、代替的教師教育の軸となる概念として提示される。同概念は、以下の各章においてそれぞれ独自の側面から光を当てることでより詳細な輪郭を現した。</p> <p>第2章では、カベルによる J. L. オースティンの解釈を手がかりに、「読む人としての教師」は、言語行為としての読むことを通し、知識(knowledge)の獲得を主眼とする教育の言説に、思考することそのものへの人格的な関わり直しである受諾(acknowledgement)の契機をもたらす者であることが確認される。そのような契機は、母語(mother tongue)の内側から、カベルが着目するソローの用語である父の言語(father tongue)でもって語り直すことで体现される。</p> <p>第3章では、ウィトゲンシュタインの教示の場面をめぐるカベルの再解釈の議論から出発し、教師の語り直しに忍耐が関わることを示唆される。教示の場面において教師と学び手とを隔てる不可知性は、既存の言語の規準への失望と重ねられる。そこで教師の忍耐は、教師自身の態度や情緒としてよりも、教えるという営みの再定義の過程としての、学び手との関わり直しという様相を呈する。「読む人としての教師」にとって、既存の規準への追従(conformity)と異なるかたちでテキストへと向き合い続けるという、反転する思考(aversive thinking)の実践は、そのような関わり直しの端緒となる。</p> <p>第4章では、カベルが道徳的完成主義の重要なテキストと位置づける J. S. ミル</p>			

の思想から、教師教育における読むことが、決められた問いへの正解を効率的に獲得するためのものではなく、むしろ何が真の問いであるのかという気づきをもたらすものであることが含意される。「読む人としての教師」は、学び手との関わりのなかで、ミルのそれに代表されるようなテキストとの出会いを喚起する者であることが含意される。

第5章では、カベルが「正義の会話」に連なる試みとして高く評価するロールズの正義論を手がかりに、「読む人としての教師」が、読む人であると同時に聴き続ける人であることが示唆される。正義の女神は目隠しをしていても耳は塞がれていないという事実が象徴するように、読むことはテキストに含意される異なる声同士の会話を聴き取ることである。そうした意味で、「読む人としての教師」は、「何が正しいことか」という「正義の会話」に学び手をいざないつつ、自らもテキストに媒介された「正義の会話」の実践者である。

第6章では、エマソンの「詩人」と H. D. ソローの「エコノミー」という用語に含意される「読む人としての教師」の具体的な様相について、カベルの「未達成だが達成可能な自己」を手がかりに論じられる。読むことにおいて、「未達成だが達成可能な自己」としての教師が予兆される。そのような教師は、日常言語で語りつつ、教育の閉ざされたエコノミーを内破する創造的な働きに関わる者であることが含意される。

結論として、各章で論じられた諸側面が、次のように重なり合うものであることが確認される。すなわち、「読む人としての教師」にとって読むことは、教える者・学ぶ者としての人格をかけた言語行為であり（2章）、それは同調への圧力のさなかにあって反転する思考の実践であり（3章）、そのような思考は問いへの答え探しではなくテキストに喚起された新たな問いへと開かれることであり（4章）、テキストに向き合うなかで出会い直された自己と他者の声を聴き続けることであり（5章）、聴き取られた声に予兆される教師の姿と教育のかたちに向け出立することである（6章）、という連環である。

今後の課題として、「読む人としての教師」を基軸とする代替的教師教育の特質である、嘆きから出立への持続的な転換において、教師がいかに読み直すのかという問いへの（再）応答が必要である点が示された。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は現代米国の哲学者スタンリー・カベルの提唱する 19 世紀の超越主義思想家、ラルフ・ウォルドー・エマソンの道徳的完成主義の観点を通して教師教育の原理的な再検討を行うものである。エマソンの道徳的完成主義は、よりよき生を希求する自己実現の思想であり、民主主義を生き方として希求する思想である。本論文の最大の特徴は、このエマソンとカベルの思想を、「教師の声」の回復という主題につなげ、「読む人としての教師」というオリジナルな視点から、読むことを通じて自らの声を再生させる代替的な教師教育のあり方を提言したところにある。カベルについての研究は、まだ先行研究が数多くはなく、とりわけ教師の声という視座からカベルの言語哲学を扱う研究は希少である。その点で、本研究はきわめて独創性の高い研究であり、カベル研究にも大きな貢献をなすものと評価された。本論文の優れた点は、以下の三点である。

第一に、本論が、カベルの難解な哲学を扱いつつも、同時に、日本の教師教育の問題を教師の声の喪失という実存的次元で捉え、教師が専門職としてその声をいかにして回復できるかというきわめて実践的な問題意識に貫かれたものであるという点である。こうした教師の声の喪失の背景として、アカウントビリティの文化の中で教師教育を語る言語が、教員の資質の向上・それによる効率性の向上といった単調な論法の浸潤によってやせ細ってしまっていることがあげられる。本論はこうした実践的課題にカベルの日常言語の哲学から取り組み、「創造的読書」という代替的教師教育を提言することを通じて理論と実践を融合させる実践哲学研究として高く評価される。

第二に、カベル哲学研究としてのオリジナリティである。本論の構成は、「教師の声」を軸に、オースティンの言語哲学、後期ウィトゲンシュタインの言語哲学、J. S. ミルの「自由論」、ロールズの「正義の会話」など、カベル哲学を構成する多角的視点・背景に各章で光を当てることにより、その言語哲学の多層性を明るみに出すものである。これらの議論を通じて徐々に浮かび上がるカベルの声の思想を元に、最終章で「読む人としての教師」の姿が具体的に提示された点が評価された。

第三に、「創造的読書」という代替的な教師教育のビジョンを提言するにあたり、「最も私的なものが最も公的なものとなる」というエマソンの完成主義の思想に即して、教師の私的な声の活性化が、専門職としての教師の公的文化の再生には欠かせないものであることを哲学的に解明し実践的に示した点である。

以上のように本研究は、カベルの言語哲学、エマソンの道徳的完成主義と教師教育をつなぐ初めての研究としてそのオリジナリティが高く評価されると同時に、いかに生きるかという人間の根本にふれる問いと社会のあり方を切り離せないも

のとして扱う点が、教育人間学・臨床教育学においてきわめて重要な問題提起を行うものとして評価された。また、本論文は英語で執筆されたものであり、試問の半分以上は英語で行われたが、論文本体および質疑応答においては、一貫した問題意識と明晰な執筆が評価されたと同時に、読む者、聞く者に、人が自らの声を持っていきることの大切さを実感させる生きた哲学の力を感じさせるものであった。

なお、試問においては、以下の問題点も指摘された。1)カベル哲学研究の先行研究の中での位置づけが不十分な点。2)「声」「テキスト」「読むこと」といったレトリックに比重を置きすぎたために、その実態、様相がつかみがたくなる傾向。3)日本の教師教育をめぐる先行研究が古いという点。こうした課題は今後のさらなる発展に向けた指摘であり、本論文の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年11月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降